

あそぶ、まなぶ、いきる。

山と溪谷社

An impress Group Company

各 位

2026年3月12日

株式会社 山と溪谷社

<https://www.yamakei.co.jp/>

暮らしの安全を守るためにも今知っておきたい「山の温暖化」12の事例を取材。

ヤマケイ新書『温暖化で日本の山に何が起きているのか
シカ、クマ、ライチョウが棲む山の生態系の危機』を3月12日発行！

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、ヤマケイ新書『温暖化で日本の山に何が起きているのかシカ、クマ、ライチョウが棲む山の生態系の危機』を発行しました。



富士山の永久凍土がとけ
水源のブナが枯れ
シカが高山植物を食べ尽くしている——
山の変化は暮らしをどう変えるのか？

南アルプスではお花畑が消え、丹沢や筑波山ではブナ林の荒廃が進んでいます。さらには、豪雨による登山道流出、シカの異常繁殖、そしてあいつぐクマの出没——。一見ばらばらに見えるこれらの異変は、長い進化の歴史のなかで保たれてきた山の生態系が、いま大きくバランスを崩しつつあることを示しています。

その背景にある共通のキーワードが「地球温暖化」です。

山で起きている変化は、私たちの暮らしや経済活動とも無縁ではありません。同時に、地球規模の温暖化とも密接につながっているのです。

豊かで便利な暮らしを支えてきたさまざまな経済活動やが、結果的に高山の生態系を危機に追い込んでいるとしたら、いまその現実を知ることは、誰にとっても欠かせないことです。

本書は、北は北海道・大雪山から南は九州・霧島連峰の韓国岳まで、日本各地の山で進行する異変を最新研究と現地取材から迫りました。伊吹山のシカ食害、南アルプスの高山植物の衰退、北アルプスの氷河やライチョウ、富士山の永久凍土——これら個別の事例を「温暖化」という軸でつなぎ、山岳環境の変化を浮き彫りにします。

月刊誌『山と溪谷』の連載、および山と溪谷オンラインの記事から大幅に加筆。いま山で何が起きているのかを知り、これからの自然と暮らしを考えるための一冊です。

高山植物の消失

1979



↓

2009



1979年、南アルプス塩見岳の南斜面にはシノキノキンバイをはじめとする高山植物群落が増えていたが、2009年にはまったく存在しなくなった。シカ個体数の増加に伴う影響は高山帯の広範囲に及び、植生破壊だけでなく土壌流出も伴うため、脆弱な高山生態系に大きなインパクトを与えている(写真=増沢武弘、編岡一博)

ライチョウの野生復帰



中央アルプスの駒ヶ岳で50年ぶりに発見されたライチョウのメス。当初、無精卵を有精卵に交換する孵化実験も行われたが、サルスの接近により失敗。その後、乗鞍岳からヘリで空輸したオスとつがいとなり、初めて野生繁殖に成功した(写真=中村浩志)



北アルプス東大天井岳で撮影されたライチョウのヒナをくわえるサル。サルスの個体群増加と高山域への進出は、ただでさえ厳しい高山帯の生態系に大きなインパクトを与え、問題となっている。このため、中央アルプスではサルスの追い払いも実施されている(写真=中村浩志)

第8章 プナの森が消える日



鬼ヶ岩から見る丹沢・経ヶ岳。5月の新緑のなかでも、ブナ林が衰え、裸地化が進む状況が見て取れる(写真=PIXTA)

命を育むブナ林が、なぜ衰退しているのか？

国土の3分の2が森林に覆われる日本。なかでもブナは、北海道南部から鹿児島まで広く分布し、日本の自然を形作る天然林の一つだ。世界遺産・白神山地に代表される深い森は、クマやサル、シカなどの哺乳類から鳥、昆虫、植物、菌類まで豊かな生命を育み、暮らしに欠かせない水源を涵養してきた。

そのブナ林の衰退が今、各地で進んでいるという。

丹沢には美しいブナの森が広がり、四季折々の美しさで多くの人びとに親しまれてきた。ミズナラ、カツラ、モミの巨木が生え、コイワザクラ、イワカガミ、レンゲシヨウマが季節ごとに咲き、ツキノワグマをはじめ、シカ、カモシカが闊歩している。溪流をイワナ、ヤマメ、カジカが泳ぎ、その餌となる水生昆虫も豊富だ。丹沢からの豊かな水流は、相模湾の魚やプランクトンにミネラルなどの滋養をもたらしている。ところが近年、標高1673メートルの経ヶ岳から丹沢山にかけての主稜線や、檜洞丸の山頂(標高1601メートル)付近を中心に、ブナ林の衰退が進んでいる。神奈川県自然環境保全センターの報告書によると、丹沢のブナ林衰退の要因は主に3つで、大気

汚染(オゾン、乾燥による水ストレス)、そしてブナハバチというブナ特有の害虫の影響が大きい。さらに、シカによる食害、稚樹の減少、地球温暖化による雪の減少や乾燥といった要因も絡み合い、状況は複雑化しているという。

実は丹沢のブナ林の衰退は今に始まった話ではない。1970~1980年代ごろから大気汚染との関係が注目され、二酸化硫黄がブナの枯死・衰弱に関与したとされている。シカの食害や温暖化の影響は1980年代から目立ち始め、1990年代中頃には顕在化するようになった。さらに、1990年代後半からはブナハバチによるブナの葉の食害が目立つようになった。

これらの複合的な影響を、さらに場所の違いや標高の違いなども考慮してわかりやすく示したのが次

147

146

■内容

- 第1章 世界でも温暖な場所にある日本の「氷河」の行方
- 第2章 温暖化時代を生き残れるか？ 奇跡の鳥ライチョウが飛んだ日
- 第3章 消えたお花畑—シカの食害と温暖化
- 第4章 マイクロプラスチックの雪が降る
- 第5章 変わりゆく霊峰高尾山と2つの危機
- 第6章 世界の山の温暖化事情最前線
- 第7章 「登れない名山」伊吹山のシカと豪雨災害
- 第8章 ブナの森が消える日
- 第9章 解ける富士山
- 第10章 登山道で山の環境を再生させる
- 第11章 なぜクマは人里に下りてくるのか？
- 第12章 花が咲いても虫がいない？ 狂わされた生物季節
- 第13章 統合的生態系管理を目指して

■著者について

岡山泰史(おかやま・やすし)

1969年神戸市生まれ。筑波大学生物科学研究科博士課程前期修了(理学修士)。高校時代は山岳部、大学ではワングルで日本の山の魅力にめざめる。大学院で植物生態学を専攻した経験をもとに、山と溪谷社に入社後は保全生態、生物多様性、近年は気候危機をテーマに取材、編集に取り組む。趣味はトリアスロン。共著に『つながるいのち—生物多様性からのメッセージ』『あなたの暮らしが世界を変える—持続可能な未来がわかる絵本』(いずれも山と溪谷社)、『「自然の恵み」の伝え方—生物多様性とメディア』(清水弘文堂書房)がある。日本環境ジャーナリストの会会長。

■書誌情報

発売日:2026年3月12日

定価:1430円(本体1300円+税10%)

体裁:新書判、232ページ(カラー口絵8ページ含む)

ISBN :978-4-635-51093-6

<https://www.yamakei.co.jp/products/2825510930.html>

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。

さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス(本社:東京都千代田区、代表取締役:塚本由紀)を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当:岡山

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: info@yamakei.co.jp

<https://www.yamakei.co.jp/>